

滞英2年の 生活を顧みて

— 7 —

庶民の生活(2)

砂川 一郎

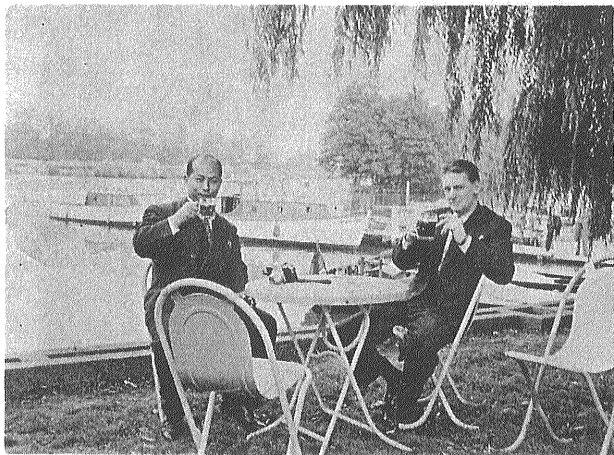
酒 場

英国で生活していたと言うと 「スコッチ・ウイスキーの良いやつをうんと飲めたでしょう」と聞かれる。それほど英国（本当はスコットランドだが）はウイスキーで有名であり 英国内では高級ウイスキーが安くて飲めると一般には思われているらしい。しかし事実はこちらと大変違っている。なるほど 田舎の酒場でもジョニーウオーカーの赤やブラックアンドホワイトと言った類のウイスキーのびんが並べてある。普通1杯が2シル半から3シルだから125~150円にあたろう。1本で2500円位である。ウイスキーの本場で飲むには決して安いとは言えない。実際一般庶民は特別の場合でないとういすきーは余り飲まず 専ら1杯50円のビールを飲んでいる。その上ジョニーウオーカーの黒やオールドパーなどの高級ウイスキーは 輸出にまわっていて 英国内の酒場や酒店では仲々お目にかからないのである。高級品を輸出にまわして 国内消費は専ら二級品で満足しているというこの英国の方策はウイスキーだけでなく衣類 毛織物 自動車等すべての輸出産業の面で徹底的に行なわれている。大戦終了後の困難期をのりこえるために始められたこの政策 15年もたつて生活も経済も安定し繁栄している現在でもなお徹底的に行なっている態度には感心させられるし 見習うべき点が多い。

ところで英国内には日本の場合よりもはるかに徹底的にどんな田舎の小さな部落へ行つても 必ずと言ってよ

いくらい酒場がある。酒場と言つても 日本式に飲んで騒ぐ場所というよりは むしろ社交場と言った方が良いでしょうなところである。田舎に行くとも随分古い数百年もたったような酒場も多く またその古いことを看板にして古いものの好みの上流紳士 淑女の客を集めているところもある。そういう高級な場所ではなく 昔どおりの酒場には部落の人々が食事後に集まってきて アルコール分をとりながら談笑したり ダイスやカードを楽しんでいると言つた零囲気に満ちている場所が多い。英国の酒場はどこでも Public house (通称パブ) と Saloon との2つの部屋にわかれている。パブとサロンの間は精々ドアが一枚おいてある程度にしか切られていず カウンターは両者に共通して連続している。つまり同じバーテンダーが両方でサービスするしくみになつている。酒だるも酒びんも全く共通である。ただ違う点はサロンの方が椅子 机などの調度品が多少高級であるという点と 値段がビール一杯について5円から10円程高くつくという点だけである。同じものを飲みながら値段が違うというのは不合理なはずなのだか サロンの方は昔から中・上流階級用 パブは労働者用として区別されてきた習慣が今に残っており 値段が高いのは紳士としてみなされるための税金なのであるか? こんな身分差別など徹廃してしまつたらよさそうに思うのだが 保守的な苦国人はこういう区別を一向に不思議とも不合理とも思っていないかもしれない。

パブでもサロンでも いわゆる酒場では 女性がそばでサービスするという習慣は全くなく そればかりではなく 給仕によるサービスも全然ない。客はただ カウンターのところにいつてバーテンダーに所望の酒をついでもらい 金を払いグラスを自分でテーブルの所にはこんできて飲むか あるいは ちょっとした常連になるとカウンターのとまり木のところに坐つてバーテンダーとおしゃべりしながら飲むかするわけである。かわりの注文をするときも 自分からグラスをもつて注文しな



酒場はいたるところにある (左:砂川牧官)
テムズ川沿いに……



コーンウォールの片田舎にある酒場

ければならない。随分サービスの悪い話であるし 第一女性がそばにいないというのは日本式酒飲みにとって随分つまらないことであろう。大体こういう酒場へ行くのは家で夕食をすましてから夜の一刻を楽しむために出かけるのであるから ひどく深酔いして高歌放吟する連中や他の客にからんでくるような酔払いはいほとんどお目にかかることはない。皆静かに話していたりダイスやポーカを楽しんでいる位が関の山であるから日本式酒飲みにとってはますます味気ない場所となろう。もつとも私のように酒があまり飲めない人間にとっては日本の飲み屋よりはるかに親しめる雰囲気ではあつたがもちろん ロンドンやマンチエスターのような大都会には日本式のキャバレーやバーに類する飲み屋があることはあるが それは皆会員制で1000円から2000円位の入会金を払わなければ入れてくれない。そういう場所では随分ひどいドンチャン騒ぎをやったり 女性のサービスも相当なものであるという話を聞いたが 私は不幸にして見学していないから保証の限りではない。しかし一般的にいうと 英国の生活や 英国人の精神構造をみると すべての面で 90数パーセント位までは非常に健康で紳士的な生活が行なえるよう または行なわねばならぬようにしくんであり そのかわり残りの数パーセントのところで徹底的にはめをはずし 人間性の一番しゅう悪な部分をおもいきりはき出すことができるようにしくまれているようであるから クラブ制のバーの話も本当であろう。そのかわり健全な面の一般酒場には夫婦連れだつてきて一杯のビールかシエリーでじゅうぶんに一タを楽しむことができるのである。

また英国では酒の飲める時間が法律で制限されている。昼1時間乃至1時間半 夜は6時～6時半から 10時～10時半までの4時間だけである。それ以外の時間は酒場だけでなく 酒類販売店も完全にピシャリと閉まつていて 裏口から行つても決して酒を売ってくれない。

法律を守ることに關しては全く貞操堅固な英国民である。この時間は州毎に違つていて たえばサリー州では10時に店がしまるが 隣のパークシャー州では10時半まで開いているといった具合である。だから州境近くに住む人は サリー州の酒場で最後の一杯をひっかけると 急きよ車で隣のパークシャー州の酒場までかけてあつて30分を楽しもうとする。酒飲のいじましい心根は どこの国でも同じだとみえる。

10時の閉店間近になると 「Last order please (最後の御注文をどうぞ)」とバーテンが大声をはりあげて知らせるのがならわしである。そうすると皆最後の一杯とばかり わつとカウンターのところ集まってくる風景がどこの酒場でも 必ずみられるのである。

英国で一番飲まれている酒は何と言ってもビールである。もつともビールといってもわれわれがもっているビールの概念とはおおよそ違った味のもので マイルド(甘口)とビッター(辛口)の2種類がある。ビッターの方はこはく色の透明なビールでにがい味がし 多少は日本式のビールに近い味をもっているが マイルドは暗褐色で甘いビールなのである。何れも樽から出す生ビールであるが ともかくお世辞にもおいしいものとはいへた代物ではない。第一甘いビールなんてわれわれの想像を絶するものであろう。ビールの次に飲まれるのが Guinness is good for you という宣伝文句で有名なアイルランド産の黒ビールとも言うべきギネスという酒それからマイルドやビッタービールよりもはるかに日本式のビールに近い味をもつエールである。ぶどう酒は余り一般に飲まれていない。そのかわりシエリーは殊に女性の間でよくつかわれ シエリーパーティーと銘打つパーティーがよく開かれるほどである。ウイスキーはもちろんスピリットのうちでは一番よく飲まれている。

日曜日

・英国ではたいいていの会社や役所が1週5日制で 土曜



ホリデー リゾートに……

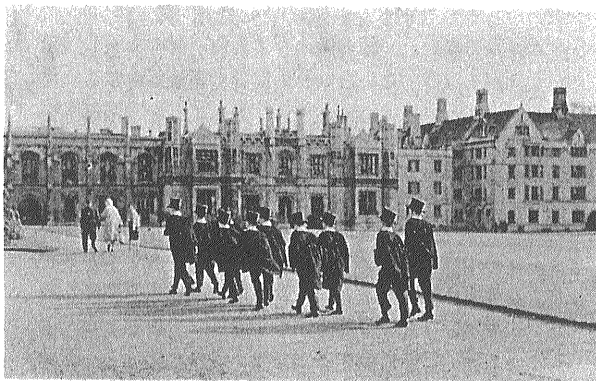


酒場 サロンの内部カウンターのところ たいいていの酒場で 内部の調度品に古い時代がかったものを使っている

日曜日は休みである。商店も5日制でたいていの店は日曜日は完全に休み 土曜日と水曜日は午前中だけで午後は休みというシステムになっている。だから勤め人にとって土曜日はショッピングデーで たいてい夫婦揃って1週間分の食料品や日用品の買い物に土曜日の午前中をついやすが普通である。午後は映画に行ったりガーデニングをしたりしてすごす。日曜日の朝は日本の家庭と同じ様に皆大変朝寝坊する。ただ日本の場合と違うことは 奥さんが旦那さんよりもずっと朝寝坊をすることである。前にも書いたように私は滞在中2つの違った家庭で下宿生活をしたが いずれの場合も 日曜日の朝はまずご主人が起き出て 暖炉をつくりお湯をわかし 朝の紅茶を入れて奥さんのベッドに持参する習慣があった。奥さんはベットの中で旦那さんの入れてくれたお茶を飲み それから起き出す人も居るし もう一寝入りする人もいる。その間にご主人は コーンフレーク ベーコンエッグの朝食をつくって一人淋しく食べるか 奥さんのおいでをまつ。

朝食後ご主人はサンデーブナー用のポテトやニンジン の皮むきをしたり庭の手入をしたりする。奥さんは10時半か11時頃になると のこのこ起き出してきて デナーの仕度を始めるわけである。

英国の男性に聞いてみると 1週間ずつと早起きして旦那の朝飯をつくってくれたり 夕食の仕度をしてくれたりしたのだから 日曜日位奥さんにサービスするのが当然なのだという話である。男性天国の日本的習慣がしみついている私などの目からみれば なんというhen-pecked な(女房の尻にしかれた男)連中だろうと思われる。英国の男性の hen-peck さは日曜日の朝だけに限ったことでなく 例えば食器の洗い上げなどは たいていの旦那族が身分の高下を問わず たとえ大学教授であろうと果さねばならない業務の一つである。日本では旦那は台所の用事などしないものだと言ったら 皆ひどくびつくりしていた。そして私が友達と一緒にスコットラン

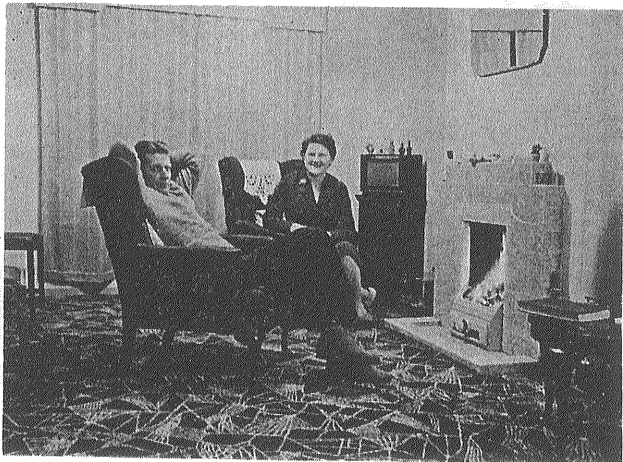


ケンブリッジ・キングスカレッジの教会の
コーポーイたち

ドを旅行した際 野外でとった食事のあとかたづけをし 皿洗いをしたら その写真を撮り 鬼の首でもとったように教授をはじめ教室中の人にみせびらかすし 留守宅の案内のところまでわざわざ送り届ける始末であった。

英国に到着当座 女性喫煙者の数が男性よりも多いように思えてびつくりしたものだだったが その理由も後になってからわかって来た。私の解釈はつまりこうである。英国では高率の税金のため煙草の値段が大変高い。日本の約4倍位にあたろうか。だから煙草は一種のぜいたく品みたいなもので 家計費を節約する際 一番最初にやりだまにあがるのが煙草である。だから英国の男性族は 女房には孝行したいし 2人揃って吸うだけの煙草代はないし 泣く泣く自分が禁煙して奥さんにサービスしているのである。実際奥さんが煙草を吸い旦那さんが吸はないでいるといった カップルが大変多いのに 私などはずいぶん奇異な印象をもったものである。こうした例をあげて 英国の男は hen-peck だとかからかうと 彼等はむきになって反論し 英国の旦那族は女房に親切にはするが実権は男性が握っているのだから 決して hen-peck ではない。本当の hen-peck はアメリカ男性で 彼等は家の実権すら 完全に女性に握られている。それが証拠にはアメリカの広告は全て女性にアピールすることを中心としてつくられているではないか。これに反してお前の国では まだ男女同権が確立されていない野蛮国の状態で それも時日がたつと俺達と同じようになるのだぞと言うのである。そうは言いながらも 日本の男性の地位を非常にうらやましがっているところを見ると 彼等も本心では専制君主でありたいのであろう。ところで 日曜日の朝の行状をみると 英国のご婦人方はいかにも自墮落で怠惰な女性のようにみえる。しかし実際には決してそうではないから ここで英国女性の名誉のために一言弁護しておく必要がある。

カレッジや一般家庭にパートタイムできている掃除婦た



だんろのある居間 どの家庭にも部屋にはじゅうたんが敷きつめてある



イースターパレードに出たファンシーハット
(ハイドパーク)

ちが 自律的に勤勉でちり一つ残さないように徹底的に仕事を遂行することは前にも書いたが 家庭の主婦達の家事に対する態度も まさにその通りで小まめに清潔に家の中をきりもりしている。どこの家庭をたずねても 室内が大変よく整頓され 清潔に保たれているのに感心する。しかしそれだけが彼女らのよさではなく日本の女性と大変違っている点は 彼女らが非常に自律的 独立的であり 自分の主張 政治意見をはつきりもっている点である。英国の女性と政治や人生のことを話していると 日本で男性と議論しているときと同じ位に話をすすめることができる。

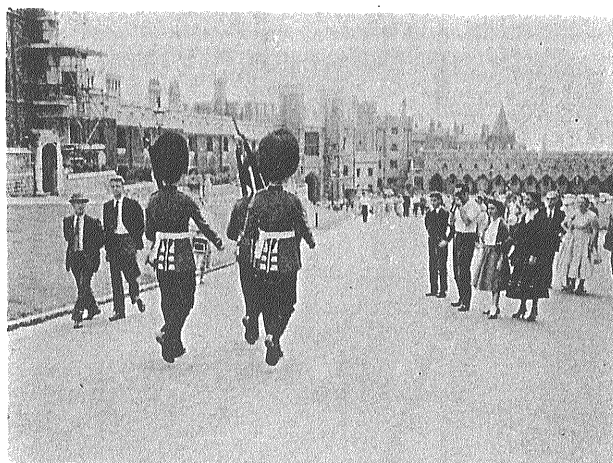
それが カレッジに居るインテリ女性だけではなく一般家庭の主婦 あるいは大学教育を受けてない人達ですらそうである。もちろん後者の場合は論理的ではないが 少なくとも自分の主張をはつきりもっていることはわかる。選挙の際どの政党を選ぶかについても夫々のはつきりした意見をもつて居り しかもそれなりの理由をもっているのである。私と同じ実験室にいたサーリと言う博士コースの女学生の研究態度をみてみると彼女がインド人の男性研究者よりもはるかに自律的に研究を進めているのにびっくりさせられたものである。研究上だけでなく たとえば自分の自転車のパンクをなおしたり 自動車のちょっとした修理までさっさと自分でやってしまうのである。こんな風なので私には英国のご婦人方が一向に女性として目にうつってこなかったし いわゆる女性的な暖かい雰囲気というものを彼女らの中にみいだすのがむずかしかった。これは多分私が男性王国の日本で育ってきたためなのであろう。

話が横道にそれてしまったが 日曜日の朝は 一般には大変寝坊をするので 教会に行く人は英国に行く前に想像していたよりもはるかに少なく感じられた。私が下宿していた2軒の家のご夫妻ともども 2年間のうち一度も日曜日に教会に行った姿をみなかったし カレッ

ジの礼拝堂でも祈りを捧げる学生の数は近年大変減少しているそうである。キリスト教もだんだんと仏教にきてきて 婚礼と葬式の儀式を司る場所に変ぼうしつつあるのかもしれない。教会へ行くかわりに たいいてい朝寝坊し サンデーデナーで腹をふくらまして 午後は庭をいじつたり テレビをみたり 魚釣りや映画に行ったり のんびりと1日を過す人たちが多くようである。

クリスマス

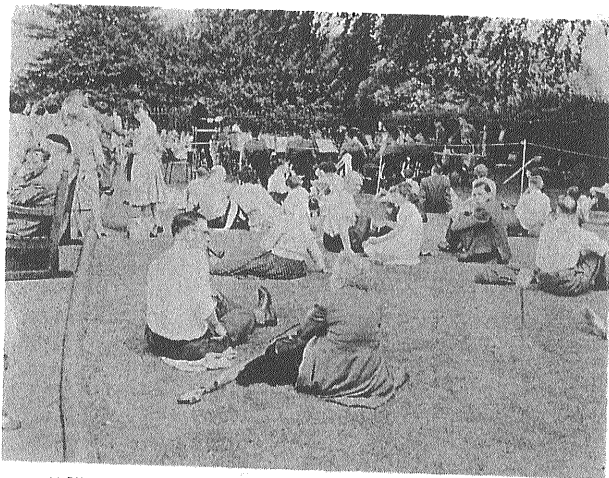
英国では1週5日制で休日の数が多いせいにか 祝祭日の数は日本ほど多くない。Easter とか Good Friday, Boxing day, X-mas 等にかざられており その中でなんとと言っても X-mas が一番盛大である。クリスマス当日をはさんで前後3~4日が完全に休日となる点は日本のお正月と同様で この日は何処の家庭でも盛大にお祝いする。クリスマスは大体が家庭のお祝いで 役所会社 学校はもちろん 商店 映画館なども休みとなるし 鉄道やバスなどの交通機関も半減ないし1/3に減ってしまう。だから町中は死んだように静かになり 家々にのみ あかあかとあかりがともし 談笑の声が聞こえてくるのである。どこの家庭も 日本でお正月を迎えると同じように 1週間も10日も前からクリスマスの御馳走の準備をし 家の中をクリスマスツリーや豆電球 造花などで飾りつけ 個人個人が知恵をしぼって贈り物を考える。クリスマスカードも送り先に応じて適当に美しい あるいはユーモラスなカードを選んで発送する。日本の年賀状のように誰にでも同じものを送るといつた通り一ぺんのものではない。だからクリスマス前の店頭には 実に種々様々のクリスマスカードが売り出されカードの専門店すらある。クリスマスカードに限らず結婚 出産 誕生日等 英国人はカードをやりとりするのが好きらしく 種類も豊富で大変美しいものもある。友達用 兄弟用 親子用等 カードに印刷されているお祝いの文句も別々にわかれている。



日曜日のウインザー城

クリスマスイブから当日にかけては 一家が揃ってクリスマスの御馳走をたらふく食べ ワインやビールを飲み だんろを囲んで談笑したり 遊びにうち興じたりする。他人の家をたずねることも余りせず 精々独立した子供達が親の家を訪問するぐらいなものである。だから街は死んだように静かになってしまう。親類縁者のないわれわれ留学生にとっては 映画にゆくわけにもゆかず家にとじこもっているか カレッジに行って仕事をするか 運がよければ友達の家に招待されてクリスマスデナーを御馳走になることができるぐらいで 余り面白くもなく むしろ淋しいクリスマス当日である。しかしカレッジでは クリスマスの休暇に入る前に 各クラブやグループで 夫々に盛大なクリスマスパーティが開かれる。私たち留学生もいくつかのクラブから招かれて楽しく一夕を過ごすことができる。カレッジが全寮制なので 学生の個室がパーティーの会場に使われ 造花やツリー 豆電球などで飾りつけられる。ワインやシエリーも出るし 福引やいろいろな遊びが計画されダンスも盛んで 仲々にぎやかで愉快なパーティーである。クリスマスが 1週間位続いて休みになるかわりに 新年は全然休みにならない。お正月の特別料理もつくらず 勤めも商店も全く平常通りである。ただ普段と違っているのは 大みそかの晩は 10時半で閉店となる酒場が 12時まで開いている点だけである。大みそかにはテレビも深夜放送が送られるが たいていは 専らスコットランドの New Year Ene のさまざまな放送である。というのは スコットランドでは 大みそかと新年を 日本同様非常に盛大に祝い そのかわりクリスマスを静かに過ごすからである。スコットランドではお正月料理をつくり ウイスキーを飲み 爆竹をならし盛大にダンスをして新年を迎える。

小さな英国島の中の北と南でこれだけ習慣が違うのだ



日曜日にはウインザー城で女王の楽隊がすい奏する

から面白い。習慣が違うだけでなく イングランドとスコットランドの間では法律も通貨も違うし 第一スコットランドの人間は大変強い反英意識をもっている。

スコットランドへ行ってイングリッシュの悪口を言えば ウイスキーの一杯に軽くありつけようというほどに反英意識が強いのである。両者で結婚に関する法律が違っているので 親に結婚を反対されたりすると 若者達はたちまちスコットランドにかけ落ちしてそこで結婚式をあげてしまう。こうした逃避行は映画の場面にも度々出てくるし 今でも現実にしばしば新聞を にぎわしている。通貨も 単位は両方同じだが 紙幣やコインの模様は違うのである。小さな島の中の陸続きの隣にあり 両方とも同じ United Kingdom (英国の正式の国名) でありながら こうした関係にあるのはわれわれには一寸想像がつかないことである。日本で言えば さしづめ 東北と関西とが互に違った通貨や法律をもっていることに相当するのであろう。イングランドとスコットランドに似た関係は イングランドとウエールズとの間にも存在する。

ウエールズは英国島の西部の山岳地帯で ここでは人種も言語もイングリッシュと違い 習慣も家族制度も違っている。もっとひどいのは 英国島の隣にあるアイルランド島である。ここは第2次大戦後独立してエールという名の国をつくつたが われわれ遠く離れているものにとっては 英国の一部位としか考えられない。アイルランドと英国との間がらは かつての日本と朝鮮との関係同様で 長い間にわたって武器をつかつて反英独立運動が続けられていたそうである。もちろん 人種も言語もアルファベットすらも違っている。あの小さい英国島の中で人種や 制度 法律 習慣などがこれ程 入り組んで複雑でいることなど 単一な ないしは すつかりまじり合って 一つになってしまった われわれ日本人には一寸想像外のことであろう。話が横道にそれてしまったが 普段の日と少しも変らないお正月も われわれ在留日本人には一つだけ大きな楽しみがある。大使館での新年宴会である。在留邦人を皆大使公邸に招待して純日本調の正月料理と日本酒で新年祝賀会を開いてくれる。在留の日本人の奥さんやお嬢さん方も振そで姿で参集するので それこそ一年に一度はるかなふる里の雰囲気にひたることができる。われわれ貧乏留学生は この日を大いに心待ちし 昼食を抜きにしても出かけて 日本料理を心ゆくまで満腹しようという 素晴らしい心すらもつほどに期待しているのである。多分この宴会のみが 在外公館が留学生にしてくれる唯一の援助であろう。それ以外は余り世話をやいてくれない

(筆者は技術部 地球化学課)